



6年生が、自分の上靴をスケッチしていました。



大小さまざま。描く向きもさまざま。時には裏から眺めてみて――。

同じ上靴でも、見方によってこんなに表現が変わるのかと、一人一人の個性を感じました。このスケッチを見ながら、「靴」から「個性」へと考えを巡らせているうちに、ある言葉に行き着きました。それは、「誰かの靴を履いてみること」です。

誰かの靴を履いてみること

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』（新潮社、2019）という本があります。著者のブレイディみかこさんは、イギリス在住の作家であり、保育士でもあります。様々な経験と多くの人との出会いを通して、幅広い視野で物事を捉えている方です。

その本の中で、「エンパシー（他人の感情や経験などを理解する力）」について、次のようなエピソードが紹介されていました。

イギリスの学校に通う11歳の息子さんが、学校で「エンパシーとは何か」と問われ、こう答えたそうです。

「自分で誰かの靴を履いてみること」。

相手の立場に立ち、その人がどのような道を歩んできたのか。これから何を望み、何を必要としているのか。「誰かの靴を履く」ことに込められているのは、そのような想像力と思いやりなのでしょう。

ある幼稚園での出来事です。

朝、一人の新入園児が激しく泣いていました。保育者がその子のそばに駆け寄ろうとした時、園長先生は、近くにいた年長児たちにこう問いかけました。

「みんなが年少さんだったとき、どうしてほしかったかな？」

すると、一人の子は、泣いている子の所にそっとおもちゃを運び、もう一人の子が優しく背中をさすり始めたそうです。

豊中小学校でも、旧5校で取り組んできたように、人権教育に力をいれていこうと考えています。周りの人の気持ちや経験に思いを寄せる力は、人権教育の中核をなすものです。

「自分がしてほしいことを、友達にできていますか？」

いつか全校集会で、本校の子どもたちに伝えようと思います。

「誰かの靴を履く」ことの出発点は、「自分の靴を見つめ直す」ことかもしれません。自分はどんな時に嬉しかったのか。どんなことをしてほしかったのか。それを見つめ、友達に寄り添っていく。子どもたちが描いた靴のように、一人一人の靴はちがいます。他の人の靴を履くことは難しいことかもしれませんが、それでも、自分の靴をじっくりと見つめた6年生は、次に誰かの靴を履こうとし、その中で多様性に気付いていくのでしょうか。